

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 邵丹

本論文は、主として1970年代の日本におけるアメリカ文学の翻訳を取り上げ、その受容が現代日本の文化のどのような文脈で生じ、どのような役割を果たしたかを論じたものである。

第1章ではまず、現代のトランスレーション・スタディーズの成果を踏まえ、特にエヴェン＝ゾハルの多元システム理論およびトゥーリーの記述的翻訳理論を参照しながら、外国文学の翻訳がある国の文学システムの中でどのような位置づけにあり、その際の翻訳規範はどのようなものがあるのか、といった問題について、理論的な枠組みを設定する。

第2章は、歴史的な文脈を概観する。ここでは1970年代の新しいアメリカ文学の受容の素地となった、「近代読者」から「現代読者」への転換、「新大衆」という消費者層の拡大、文化の再編成とサブカルチャーの細分化といった現象が論じられる。

第3章と第4章が、本論文の核心部分を成す「ケース・スタディ」である。第3章では、リチャード・ブローティガンの翻訳者である藤本和子に焦点を合わせる。1960年代に小劇場運動に深く関わった藤本が、自らの表現を通じて他者に自己を「開示」できない対抗文化の欠陥を補いながら、1970年代にはブローティガンやその他の黒人・アジア人などのマイノリティ作家の翻訳を通じて、日本における外国文学翻訳に革新をもたらしたプロセスが分析される。そして、藤本によるブローティガンの翻訳が、1970年代に台頭した若い読者に支えられた新たな文化領域を切り開くものであったことが論証される。

第4章はカート・ヴォネガットの翻訳を取り上げる。第3章が藤本和子一人の翻訳を分析したのに対して、この章ではヴォネガットの翻訳に携わった複数の翻訳者（伊藤典夫、浅倉久志、池澤夏樹など）の訳業が取り上げられ、最初SFというジャンルの作家として認識され、SF読者層に支えられていたヴォネガット作品が、次第に主流文学に受け入れられていくプロセスが解明される。

これらのケース・スタディに基づいて導かれる結論は、ブローティガンやヴォネガットといった新しいアメリカ作家たちの受容は戦後ベビーブーム世代の若い読者や、若手の意欲的な編集者や翻訳者に支えられていた、ということである。その結果革新的な翻訳規範が作られ、従来の主流文化とも対抗文化とも異なった「文化的第三領域」が切り開かれることになった。なお著者はこの論文のために、アメリカ在住の藤本和子を初めとして日米の関係者の多くにインタビューを行っており、そういったフィールド・ワークの成果も十分に盛り込まれている。

文化史的コンテクストの記述が野心的で視野が広いだけに、時に図式的な判断に傾くきらいがあるとはいえ、翻訳に関する理論的枠組みの設定、読者論を視野にいれた文化史的なコンテクストの把握と、具体的な翻訳テキストの緻密な分析が組み合わさった、類例の殆どない独創的な研究として高く評価できる。よって審査委員会は全員一致で、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいとの結論に至った。